## 【8】『深浦地方沿革志』　写1冊（47―1）

〔書名よみ〕ふかうらちほうえんかくし
〔著編者〕海浦義観　〔写刊年次〕明治年間

〔外題〕深浦地方沿革志
〔内題〕深浦地方沿革志
〔その他題〕〈尾〉深浦地方沿革志

〔残欠状況〕全　〔保存状況〕小破　〔装訂〕袋綴　〔紙数〕二五丁
〔本文用字〕漢字・平仮名　〔一面行数〕一〇行　〔界線〕ナシ
〔表紙〕本文共紙　〔法量〕縦二四・九糎×横一七・四糎　〔料紙〕楮紙（杉原）　〔書入〕注記（朱）　〔表紙書入〕ナシ　〔印記〕ナシ
〔備考〕ナシ

〔奥書〕ナシ

〔解題〕

現在、円覚寺には海浦義観の手による『深浦地方沿革誌』に関わる複数の資料が残されている。ここではそれらを、相互の関係性も含めてまとめて紹介する。

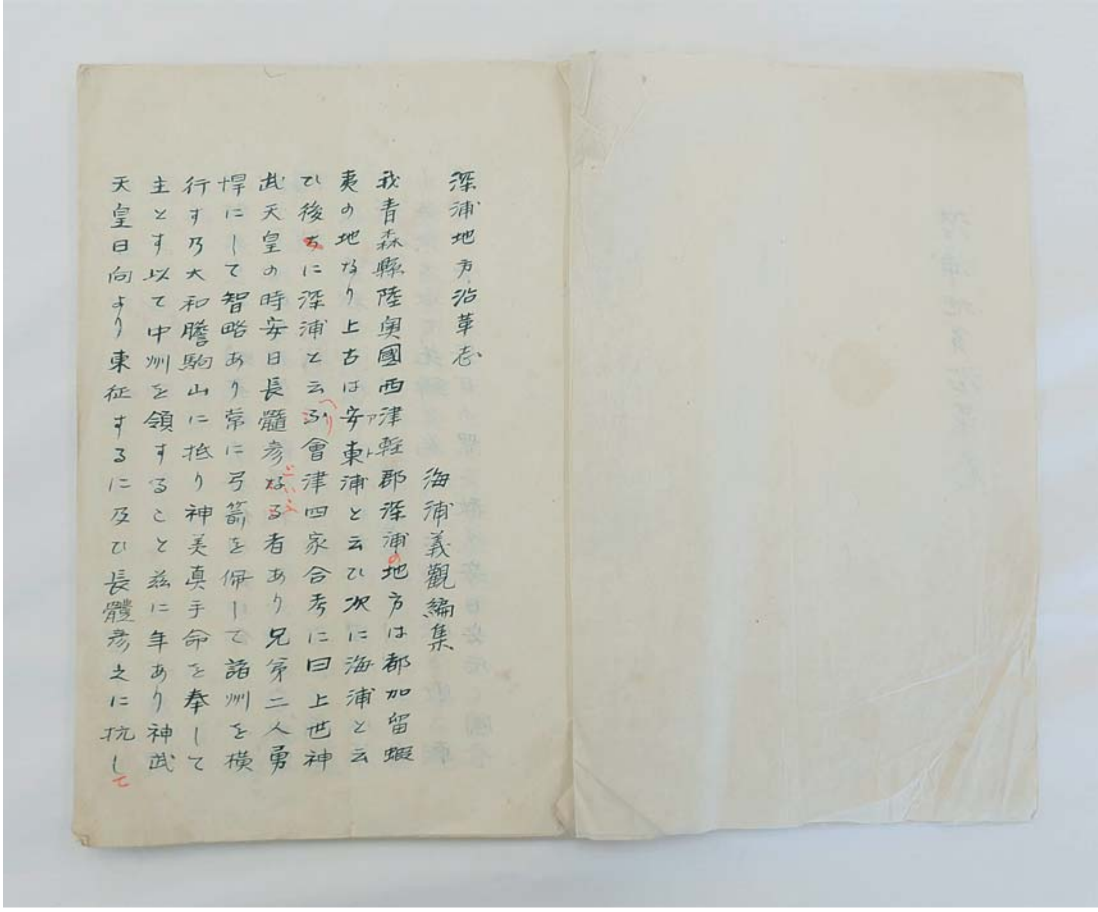
まず、この資料『深浦地方沿革志』（47―1）は、多数の書き入れ（加筆修正の痕跡）が認められることから、のちに刊本としてまとめられる『深浦地方沿革誌』（47―3、47―8）の原稿と推定される。この書物の成立の経緯については、一八九九（明治三二）年一月七日付海浦篤弥宛書簡の中に、「地方有志の求めで五百部印刷」したこと、「僻地の人間は口上斗りで実効なく充分尽力人なく困った」とあることから、あくまで義観の周囲の人びとの求めに従って義観が筆を執ったことが窺える。一方で、義観に〈地誌〉への興味があったことは『深浦十六景小記』が現存することからも明らかである。

『陸奥津軽深浦地方沿革志』（47―2）もまた手稿ではあるが、こちらには加筆修正の跡が少なく（誤字の修正程度）、また、刊本にある陸羯南と外崎覚による序文がある。すなわち、47―2は刊本を更に筆写したものであると推定される。

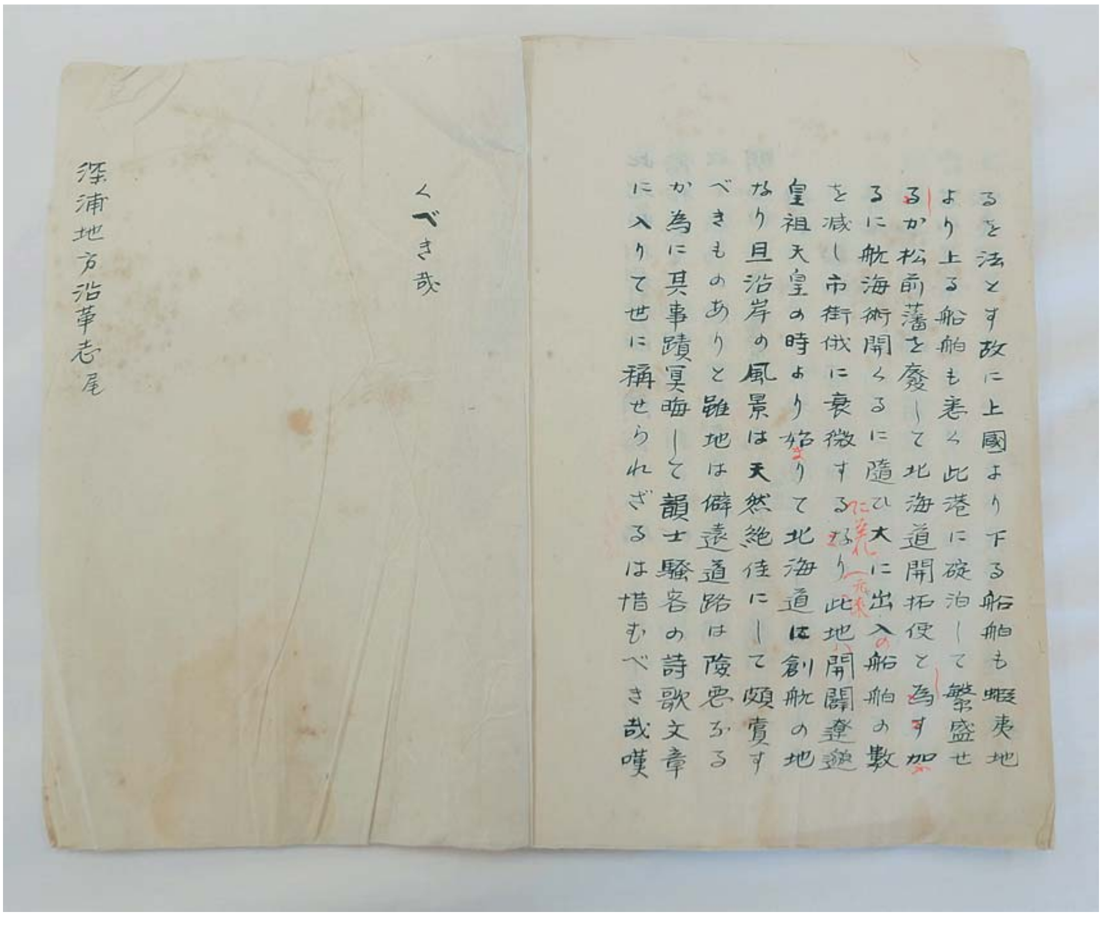
『増補陸奥津軽深浦地方沿革誌』（47―4）は、大正年間に入ってから出版された増補改訂版であり、一八七四（明治七）年以降の深浦の変容が加筆されている。

また、本書の刊行については附属する各種資料も多くのことを示している。「深浦沿革誌寄贈配賦控」（48―4）は、本書を寄贈した相手とその部数を細かに記した義観の手控えである。また、「深浦沿革誌発兌諸費控」（48―5）は本書が刊行に関する経費の記録であり、明治三〇年前後の、いわば本の作り方、出版の方法を伝える一次資料として貴重なものである。

（尾崎　名津子）



深浦地方沿革志
海浦義觀編集
我青森縣陸奥國西津輕郡深浦地方は都加留蝦
夷の地なり上古は安東浦と云ひ次に海浦と云
ひ後に深浦と云ふ會津四家合考に曰上世神
武天皇の時安日長髄彦なる者あり兄弟二人勇
悍にして智略あり常に弓箭を佩して諸州を横
行す乃大和膽駒山に拠り神美眞手命を奉して
主とす以て中洲を領すること茲に年あり神武
天皇日向より東征するに及ひ長髄彦之に抗し



るを法とす故に上國より下る船舶も蝦夷地
より上る船舶も悉く此港に碇泊して繁盛せ
るか松前藩を廢して北海道開拓使と為す加
るに航海術開くるに随ひ大に出入船舶の數
を減し市街俄に衰微するに至り此地開闢遼遠
皇祖天皇の時より始りて北海道は創航の地
なり且沿岸の風景は天然絶佳にして頗る賞す
べきものありと雖地は僻遠道路は險悪なる
か為に其事蹟冥晦して韻士騷客の詩歌文章
に入りて世に稱せられざるは惜むべき哉嘆
くべき哉

深浦地方沿革志尾